

博士論文の審査及び最終試験の結果

本論文の主題は、日本占領下のフィリピン首都圏で生じた極度の食糧不足と、それを克服するために実施された一連の食糧管理統制制度の実態を明らかにし、日本の占領体制がフィリピン社会に及ぼした困難と占領政策の失敗要因を、新たな視点から明らかにすることである。

フィリピンの日本占領期は、他の東南アジアの日本占領期と比較して、二つの点できわだっている。一つは、人的・物的被害がおびただしく甚大だったこと、二つは強力な反日ゲリラ闘争が占領の初期から末期まで終始一貫展開されたことである。こうした事情を反映して、フィリピンの日本占領期研究は抗日運動の政治的・軍事的・文化的局面と、その対極にある対日協力者の政治過程に集中してきた。そしてなぜか、占領体制の経済的局面はなおざりにされてきた。その意味で本論文は、日本占領期研究に新しい局面を切り開き、占領体制の解釈に多くの新しい知見をもたらすものであった。本審査委員会は、なかでもつぎの諸点で本論文を高く評価した。

一つは、本論文が日本占領期研究に「史（資）料革命」とでも呼ぶべき画期をもたらしたことである。この時期の研究に関する史（資）料は、当時、フィリピンが置かれた国際的情況を反映して、連合軍側史料、フィリピン・ゲリラ側史料、ラウレル政府側史料、その他一般のフィリピン国民が残した史料、日本軍側史料、日本人関係者の史料など多様であり、その所在もフィリピン、日本、アメリカ、オーストラリアなどに分散している。本論文の筆者は10年間にわたる精力的な調査で、この困難な史（資）料の壁を乗り越えた。この点について、筆者はこう述べている。「本研究で用いられている史料は、私が過去10年以上にわたって、フィリピン・アメリカ・日本の3ヶ国で調査・収集してきたもので、大量かつ多様である。私は、できるかぎり一次史料を用いるようつとめた。それらは、フィリピン人や日本人やアメリカ人によって、英語や日本語やタガログ語で書かれた公式報告書・会議議事録・命令・日記・手記などである。私は可能なかぎり、当時の新聞や雑誌などの定期刊行物の記事や論説といったその他の資料も用いて、史実の確定につとめた。日本軍政やフィリピン共和国政府（ラウレル政府）などの政府側史料を補完するために、フィリピン人やアメリカ人のゲリラ側報告書や文書類を使用した。私はまた、コメ対策の立案に協力した、あるいはそれらの対策の影響を受けた、多数のフィリピン人や日本人やその他の外国人に聞き取り調査を行なった」と。

「Bibliography」の部に整理されたこれらの史（資）料は、日本占領期研究のデータベースを一新し、研究史に新しい一頁を開いたと言っても過言ではない。とくに、従来、

フィリピンや欧米の研究者が苦手としてきた日本語の史（資）料が博搜され、正確に読み込まれていることも本論文の評価すべき点である。

これらの膨大な史（資）料の検証と比較検討に基づいて、本論文は緻密な実証研究を行っている。首都圏の食糧不足に対処するために日を逐うようにして出された諸対策と、それに対するフィリピン国民の対応が克明に追究されている。これまでの研究史のなかで、日本占領下の日々がこれほど充実した史料的うらづけと分析に基づいて跡づけられたことはなかった。本論文の第二の貢献は、食糧管理統制制度という経済政策研究がたくまずして占領下の社会史にもなっていることである。

本論文の主題は、食糧管理統制制度の全貌を明らかにすることである。日本はこの時期、植民地と占領地の多くで統制経済制度を実施した。フィリピンを含むこれらの地域で共通してみられる制度は「組合」制度である。一方、国立米穀会社 (Naric) →食糧営団 (Biba) →米穀管理協団 (Ricoa) というかたちで展開した食糧管理統制機構は、フィリピンに独自のものである。この一例に見られるように、本論文は各地の統制経済制度を比較研究する上で、すなわち比較占領史研究に貴重なデータを豊富に提供している。

と同時に、本論文はフィリピンにおける食糧管理統制制度がことごとく失敗に帰した過程を克明に追究するなかで、従来、見落とされてきた占領体制の構造を動的に解明することに成功している。一例として、日本軍政ならびにそれを引き継ぐ日本占領下のフィリピン共和国政府（ラウレル政府）が、食糧管理統制制度に失敗した最大の要因は、国立米穀会社、食糧営団、米穀管理協団などの政府機構が、生産者からごく少量のコメの買い付けしかできなかったことである。それはコメ生産農民がこの間、さまざまな方法で政府機構へのコメ売り渡しを忌避し続けたためである。同様の忌避は、「不法な」仲買商人や小売り商人の法網をかいくぐった果敢な活躍にもみてとれる。本論文があざやかに描出しているように、マニラのコメ不足は、コメ生産地の農民、仲買商人、小売り商人らのこうした「消極的抵抗」に連動しており、この「消極的抵抗」はさらに、終始一貫日本軍を苦しめ続けた抗日ゲリラの軍事闘争を下支えしてもいたのである。さらにまた食糧管理統制制度の失敗は、日本占領下におけるフィリピン国内の物流システムの破綻、ならびに「大東亜共栄圏」内の物動計画の破綻にも起因した。このように、本論文はマニラ市民の日々の生活に密着した視点から食糧管理統制制度の全貌に迫ることによって、日本の占領体制を全体的かつ構造的に把捉する展望を開いている。

本論文が評価されるもう一つの点は、ラウレル政府が立案したもろもろの食糧対策を、はじめて詳細に掘り起こしたことである。その結果、いまだ評価が定まらないラウレル政府の政治的立場に関して、政策立案過程と政策実行過程の乖離という観点から有意義な解釈を提出することができた。ラウレル政府は政策立案レベルでは、独立政府と

しての独自性を主張し、日本軍の方針に激しく抵抗してフィリピン国民を飢餓から救済するための対策を立案した。しかし、それらの政策を実行するレベルで、実現の諸条件は日本軍によって奪われ、また政府の真意を理解しない国民もこれに協力しなかった。従来、ラウレル政府の政策立案過程とそこでの日本軍への抵抗がこれほど綿密に実証されたことはなく、したがってそれについての評価もなされることがなかった。政策立案過程におけるそうした抵抗を一切無視して、政策実行過程の不成功のみからラウレル政府の「国民的立場」を否定することはできないというのが本論文の見解である。

以上の評価とは別に、本審査委員会は本論文の公刊にあたって、以下の推敲を希望した。一つは、日本占領下の食糧管理統制制度が、それまでのコメの生産・流通・消費メカニズムをどのように変化させたかをより鮮明に浮かび上がらせるために、戦前の食糧生産・流通機構を考察した第1章を、いま少し構造的に書き込むことである。二つは、本論文のスケールと豊かな内容を考えると、本論文全体をもう少し広い歴史的文脈に位置づけることが望まれる。具体的には、「Conclusion」の部分を「Overview」として、日本占領時代がフィリピン現代史のなかでどのような意味をもっているのか、またこの時期、フィリピンは東アジアから東南アジアに広がる日本の占領地域全体のなかでどのように位置づけられ、実際にどのような関係をもっていたかについて骨太な見取り図を描くことである。

以上の総合的評価に基づき、本審査委員会は全員一致して、本論文が学術博士を授与するにふさわしい論文であると判定した。